

Title	元好問と韓門文人：元好問詩における韓門の受容
Sub Title	The acceptance of Han Yu group's literary works by Yuan Haowen
Author	高橋, 幸吉 (Takahashi, Kokichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.6 (2013.), p.49- 77
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20130331-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元好問と韓門文人

——元好問詩における韓門の受容——

高橋 幸吉

一. はじめに — 金末文人と韓門文學 —

金朝末期、特にモンゴルの侵攻を受けて開封に遷都した貞祐南渡（一二一六年）以降、北方における文學的風潮は明らかに轉換した。詩歌においては章宗治世の後半から、經濟的な繁榮や皇帝の嗜好の變化もあり、優美繊細な晩唐風の詩が好まれていた。だがこの貞祐南渡前後から、人々は李白・杜甫を始めとした盛唐・中唐の詩人に倣うようになった。その中で少なからぬ人々が韓愈およびその門人である韓門詩人に注目したが、當時の文壇の指導者の一人である李純甫（一一七七～一二三三）とその門人たちは、韓門詩人に傾倒して奇怪かつ幻想的な作品を作り出した。彼らは金朝の滅亡を見ることなく世を去り、その文學思想を後代に直接伝えることはできなかった。だが彼らと交流のあった趙著や呂鯤らは李賀に傾倒し、類似した文學的嗜好を持ちつつ、金朝滅亡後の燕京で文學集團

を形成した^①。モンゴルの中書令耶律楚材の子である耶律鑄は趙著・呂鯤に師事し、さらにその子である耶律希亮は呂鯤の弟子である趙衍に師事しており、この一派が當時の燕京で少なからぬ影響力を有していたことが窺える。さらに同時代の南宋の詩人たちも李賀に注目している^②ことを考えると、十三世紀中國における詩歌の状況を理解するために、韓門あるいは李賀は、一つの有効な視点となりうるであろう。

筆者は以前金末文壇の盟主である李純甫と趙秉文（一一五九―一二三二）を例として、彼らがどのように韓門文學を受容したかを詩歌を中心に論じた^③。その結論を簡単にまとめると、以下のとおりである。李純甫は當時すでに盧仝・李賀になぞらえてその詩を評價されており、奇怪かつ幻想的な作品を作り出している。また韓愈詩における諧謔的な面からも影響を受けており、さらにその特徴を強めた作品も残している。一方で趙秉文は韓愈を歐陽脩と並ぶ文學者と位置づけ、その散文に大きな関心を示している。また韓愈の儒者としての一面に着目し、彼を儒教の道統における偉大な人物と見なしている。さらにその文集からは、自らを韓愈になぞらえる態度が窺え、儒家であり文學者であり、門人を擁する文壇の指導者であるという韓愈の立場を自らに投影している。そのほかに李賀に倣った詩では、險怪な詩風を排除して色彩表現に着目した作品を残している。両者の特徴を比較すると、李純甫は三教兼通を肯定し、傳統的詩歌觀の革新を標榜し、奇怪さを重視した。趙秉文は儒家的觀念を堅持し、傳統的詩歌觀の保持を標榜し、古典性を重視した。これが韓門文人の受容態度から窺える、兩者の差異である。

本稿ではこれらの問題意識の延長線上にあるテーマとして、金末元初の詩人元好問（一一九〇―一二五七）の韓門文人に對する受容態度を考察する。元好問は趙秉文の門弟であり、李純甫とも交友があるため、彼らからのように影響を受け、あるいはまた違った觀點を有しているのであろうか。金朝滅亡以後、元好問は中國北方における詩壇の大家であり、その活動時期は燕京の詩人集團とも重なる。彼の韓門文學への受容態度を考察することは、金

末元初における韓門受容の空白を埋める一助となると思われる。

「韓門」については韓愈とその門下および周辺の文人を指す。その範囲やどのような人物が含まれるかについては論者によって多少違いがあるが、本稿では引き続き韓愈・孟郊・賈島・盧仝・李賀の五名を検討の対象とし、彼らを總稱して「韓門文人」と呼ぶ。韓門には張籍・王建を含める場合があるが、彼らの詩風はその他の韓門文人と大きく異なるため除外する。また本稿でも詩歌を中心に考察するため、同様の理由で柳宗元も除く。金末元初では散文の改革者としての「韓柳」に対する關心に乏しく、現存資料ではその多くが詩に關するものである。特に元好問には散文一般に關して論じた文章が存在せず、その關心の所在が常に詩にあるためである。それでは以下、元好問の韓門文人に對する受容態度について検討を進める。

二、「論詩三十首」における韓門文人への評價

元好問の代表作の一つであり、文學批評史上の重要な作品である「論詩三十首」^④も、當然ながら韓門文人に言及している。本詩に現れる順に見てゆくと、第十三首（盧仝）・第十六首（李賀）・第十八首（孟郊・韓愈）・第二十四首（韓愈）の四首が韓門文人に關する内容である。まずは本詩に基づいて、元好問がどのように韓門文人を評價していたのか見てみよう。「論詩三十首」は七言絶句三十首の連作により、往古から宋に到るまでの詩と詩人を批評した作品である。そのため詩形による制限から主張が明快でない部分もあり、各詩の解釋は研究者によって見解が分かれ、未だ定説が無いものもある。先行研究の成果に拠りつつ、韓門文人に關する詩を見てみよう。^⑤

萬古文章有坦途 萬古文章 坦途有るも、

縱横誰似玉川盧 縱横 誰れか 玉川の盧に似らん。

眞書不入今人眼 眞書 今人の眼に入らず。

兒輩從教鬼畫符 兒輩 鬼畫符を教うるに従ふ。

(◆坦途 坦塗に同じ。平坦な道。韓愈「盧全に寄す」詩に見える語。◆縱横 思うがまま、自由自在。◆玉

川 盧全の号、玉川子のこと。◆鬼畫符 道教のまじないの札。轉じて意味が解らない詩文の喩え。)

第十三首は盧全詩の融通無碍な風格を「縱横」という語で評價している。そして當時一部の人々がその詩に倣つて險怪な作品を無理に作り出そうとし、その結果道教のお札の文言のように、奇妙で意味が通じない詩になつてしまつてゐることを批判する。

切切秋蟲萬古情 切切たる秋蟲 萬古の情、

燈前山鬼淚縱横 燈前の山鬼 淚縱横たり。

鑑湖春好無人賦 鑑湖 春 好けれども 人の賦す無し、

岸夾桃花錦浪生 「岸は桃花を夾みて錦浪生ず」と。

(◆切切 擬声語。か細い音を表す。◆山鬼 山の精靈。◆鑑湖 浙江省紹興にある湖。別名鏡湖。李白が「子夜吳歌」で題材としている。◆岸夾の句 李白「鸚鵡洲」の第六句をそのまま用いている。)

第十六首では李賀の暗く冷たい詩境と李白「鸚鵡洲」詩に描かれた明るく麗らかな詩境を對比している。清末の宗廷輔^⑥をはじめとして郭紹虞^⑦以下多くの論者は前半二句は李賀を批評対象としてしていると解しているが、孟郊を評しているとする劉禹昌氏の説や、第一句は孟郊を、第二句は李賀を評しているという胡傳志氏の説^⑧があり、諸家の解釋は一致しない。詩全体の解釋も一致せず、二種の詩境を對比的に述べたに過ぎないとする説、李賀（あるいは孟郊）と彼らに倣う詩風を批判したものとする説がある。多くの論者は元好問が李賀の暗い詩境を批判していると解しているが、本稿では二種の詩境を對比的に述べたものと解する。

東野窮愁死不休

東野の窮愁 死すとも休まず、

高天厚地一詩囚

高天厚地の一詩囚。

江山萬古潮陽筆

江山 萬古 潮陽の筆、

合在元龍百尺樓

合まはに元龍の百尺の樓に在らしむべし。

（◆東野 孟郊の字。◆詩囚 詩に囚われた人。元好問の造語か。◆潮陽筆 韓愈が潮州刺史に左遷された時期に執筆した作品 ◆元龍 三國時代の人、陳登の字。『世説新語』に見える故事をふまえる。）

第十八首では孟郊を批判し、韓愈を高く評價している。孟郊は一生を詩作に捧げ、その苦吟する様子は詩に囚われて苦しめられている「詩囚」のようである。韓愈は罪を得て潮州刺史に左遷されたとはいえ、そのような苦境にあっても詩や散文の名作を作り出した。兩者の生き方の違いを對比させつつ、韓愈の創作態度を高く評價していると言えるだろう。またこの詩は孟郊への批判が行き過ぎており、兩者への評價が公平さに欠けるといふ見方が現在

では多い^⑩。次に挙げる第二十四首でも同様の見解を述べている論者は多く、一部詩人への批判が厳しすぎるとい
点は「論詩三十首」の特徴である。

有情芍藥含春淚 「有情の芍藥 春淚を含み、

無力薔薇臥晚枝 無力なる薔薇は晚枝に臥す。」

拈出退之山石句 退之「山石」の句を拈出せば、

始知渠是女郎詩 始めて知る 渠これは是れ女郎の詩なるを。

◆前半二句 秦觀「春日」五首 其の二の後半二句をそのまま用いている。

第二十四首では秦觀の「春日」詩^⑪のようなあまりに女性的な作品を批判しつつ、このような詩風に對して韓愈の
「山石」詩^⑫の力強い詩境を高く評價している。だが方滿錦氏が實例を多數擧げて指摘しているように、元好問自身
にも「女郎の詩」を作っており、このように秦觀を批判するのは少々行き過ぎた議論であるという見方をする研究
者は多い^⑬。しかしながらこの詩からは元好問の嗜好が透けて見え、さらには彼が韓愈のどのような面を評價してい
たのかを窺い知ることができる。

結局のところ、「論詩三十首」は詩形などの様々な要因による制約が大きく、その議論は細部が曖昧にならざる
を得ない。少なからぬ部分の表現が抽象的であり、論全體として元好問の詩歌觀の基本的姿勢を示すのみにとどま
る。しかもこれらの四例のみを見るだけでは、彼の韓門文人に對する評價を判断することは難しい。では元好問は
自らの詩作において、どのように韓門文人の典故を使用しているのであろうか。次に實作における韓門文人の受容

について見てみよう。

三、李賀に關する典故の使用

韓門文人のなかで、元好問は李賀の詩句を度々用い、また四首においては自注で彼の詩句を使ったことを明示している^⑤。その使用頻度から見ると、李賀は間違いなく元好問が好んだ詩人の一人だと言えるだろう。その用例は詩句に止まらず、詩句の組み立てを取り入れたり、さらには李賀詩の一句をそのまま用いている例さえ見られる。以下、元好問における用例とその元となった李賀詩を挙げる。傍點部が李賀の詩句を用いている箇所である。

東家西家百壺酒

東家 西家 百壺の酒

主人捧觴客長壽

主人は客の長壽に觴を捧ぐ

卷四「讀書山雪中」

零落棲遲一杯酒

零落 棲遲 一杯の酒

主人捧觴客長壽

主人は客の長壽に觴を捧ぐ

李賀「致酒行」

玉樹瑤林照春色

玉樹 瑤林 春色を照らし

青錢白壁買芳年

青錢 白壁 芳年を買ふ

卷五「去歲君遠游して仲梁の出山を送る」

青錢、白璧、買、無端 青錢 白璧 買わんとして端無く

丈夫快意方爲歡 丈夫の快意 方に歡を爲す

李賀「相勸酒」

丹砂萬年藥

丹砂は萬年の藥

金印八州督

金印は八州の督なれど

不及秦宮、一生花裏活、 秦宮にて一生花の裏に活くに及ばず

卷六「後芳華怨」

皇天厄運猶曾裂 皇天の厄運は猶ほ曾て裂くるがごとし

秦宮、一生花底活、 秦宮にて一生花の底に活く

李賀「秦宮詩」

李賀詩のうちでも「致酒行」「金銅仙人辭漢歌」「高軒過」など、一部の作品に典故が集中する傾向があり、同一の詩句ではないが同じ作品に依拠していることが多い。先行研究で指摘されており、元好問は詩作において自らが氣に入った詩句を何度も用いる傾向がある。¹⁶これと同様に自らが愛唱する詩から何度も典故を用いるという傾向も、元好問詩の特徴のひとつであると言えるだろう。

もう一つ、元好問が用いている李賀の典故から、ある傾向を見出すことができる。幾つかの作品は李賀詩の風格に倣っているものもあるが、¹⁷李賀詩の特徴である比喩表現と各詩句の高度な独立性（意味的な繋がり希薄さ）¹⁸を、元好問は基本的に排除している。詩句の構造を取り入れたり、あるいは一句全てをそのまま用いたとしても、語と語の繋がり、句と句の繋がりは大變明晰で分かりやすい。試みに同時代の詩人である李經の作品と比較してみよう。

長河老秋凍 長河老秋に凍り

馬怯冰未牢 馬は氷の未だ牢からざるに怯む

河山吟鞭底 河山は鞭の底に吟ひ

日暮風更號 日は暮れて風は更に號ゆ

李經「雜詩」五首 其の一⁽¹⁹⁾

前半は「長い川が晩秋に結氷し、そこを馬で渡ろうとすると、馬は氷が薄いことを恐れているようである」という描寫で、難解な點はないが、問題は第三句である。山河が「鞭の底」で「うたう」という表現は分かりにくい。第四句は「日が暮れて風が強くなり轟々と鳴っている」という情景なので、「馬を驅る鞭の音が周囲の山河に響いている」という意味であろうと推測できるが、文法的にはこのようには理解しがたい。韻文は散文と違い、文法的に多少の飛躍が認められるとはいえ、字面通りに讀めば「山や河が鞭の底で音を立てている」ことになってしまう。當時彼の詩を讀んだ趙秉文も「その他はこの老いほれば特に分らない（其餘老昏殊不可曉然）」と述べているので、さらに難解な詩が多數あつたと思われる。そしてその詩を「李賀と盧仝を合わせてひとつにしたに過ぎず、古い表現によって新しい表現を作り、俗な表現によって雅な表現を作ることが出来ない（不過長吉・盧仝合而爲一、未能以故爲新、以俗爲雅）」と批判している。一方で金末文壇のもう一人の盟主である李純甫は、李經の詩を激賞して「李賀が死んでから二百年、このような詩は無かった（自李賀死二百年無此作矣）」と述べている。褒貶のいづれにせよ、趙・李の發言から、當時の人々が彼の詩に李賀詩と似た詩風を見出していたことが分かる。

再度元好問の詩を見ると、逆に奇怪な語を用いず、李賀詩の典故を用いながらもその作品は讀者に簡明な印象を與え、李賀詩とは全く異なる風格を獲得している。元好問は李賀の詩を愛好してその詩句を多用しつつも、充分に

消化して自らの作品に取り込んでいることが窺える。

元好問はこの他に李賀に關する故事や彼の個性についても言及している。彼が特に注目したのは李賀の創作態度であり、孟郊や賈島とは異なる苦吟の在り方である。

詩と散文とは源流は同じであるが別の一派であり、散文は言うまでもなく難しいが、詩は最も難しい。李賀の母は李賀が詩作に苦しむ様子を「肝肺を吐き出してようやく終わる」と言った。……それは最も難しいと言ふべきなのである。(詩與文同源而別派、文固難、詩爲尤難。李長吉母以賀苦於詩謂、嘔出肝肺乃已耳、……其可謂尤難矣。)

卷三十六「雙溪集序」

李賀の母は李賀を「評して」「必ず心臓を吐き出そうとしてようやく終わる」と言ったが、言い過ぎの論ではないのだ。(李賀母謂賀、必欲嘔出心乃已、非過論也。)

卷三十七「陶然集詩序」

ここで引用されている故事は杜牧「李長吉小傳」中のエピソードで、李賀が詩を作るために呻吟している様子を彼の母が評した言葉である。では元好問はどうして「論詩三十首」のなかで孟郊の苦吟を批判し、一方で李賀の苦吟を評價しているのだろうか。彼ら二人の苦吟にどのような違いを見出していたのだろうか。元好問は苦吟を決して否定しているのではなく、詩中に詩作の苦勞を直接表現することに否定的なのである。彼は詩文を論じた詩の中で次のように述べている。

文章出苦心 文章は苦心より出づるも

誰以苦心爲 誰か苦心を以て爲らん

正有苦心人 正に苦心有る人

舉世幾人知 世を舉げて幾人か知らん

卷二「張仲傑郎中に與あたへて文を論ず」

孟郊は詩作に苦吟する自己をそのまま詩中に描寫する傾向があり、恐らくこれが「苦心を以て爲る」ものとして元好問は批判しているのであろう。²² 元好問自身も詩文を創作する困難さを深く感じていたからこそ、同様に呻吟しつつ作品中ではそのような態度を全く表さない李賀を、「正に苦心有る人」と認めていたのではないだろうか。

結論として、元好問は李賀の詩風を踏襲することは少なかつたが、その詩語や詩句を度々使用し、李賀の作品を充分に消化して自らの作品のなかで用いていると言えるだろう。

四. 韓愈への評價とその詩歌の受容

李賀と並んで、韓門文人のなかで元好問がその詩句を多く用いているのが韓愈である。元好問は韓愈の詩句を作品中で使用しているとはいえ、その評價は彼の詩人としての側面を重視しておらず、恐らくは儒家としての側面に重きを置いているように見える。なぜなら元好問は前述の「山石」詩以外、詩文中で韓愈の詩歌を論じていないからである。さらには文章家としての韓愈にすら殆ど觸れておらず、古文運動の推進者としての「韓柳」という併稱でさえ一度も用いていない。その一方で、儒者として韓愈と歐陽脩を併稱している。

九原如可作 九原如し作す可くんば

吾欲起韓歐 吾は韓・歐を起こさんと欲す

卷一「劉御史雲卿に贈答す」四首 其の三

唐の昌黎公（韓愈）、宋の歐陽公（歐陽脩）は、偉大な儒者として、儒家の道の興廢を繫いだ。（唐昌黎公、宋歐陽公、身爲大儒、繫道之廢興。）

卷十七「閑閑公墓銘」

このことから分かるように、彼の韓愈に對する評價は趙秉文と同様であり、その見方を忠實に受け継いでいると言えるだろう。

では元好問の作品中で、韓愈の詩句はどのように用いられているのであろうか。その頻度は李賀と同様に多いが、實際には彼自身が「論詩三十首」で主張したような力強い詩風の作中で用いていない。例として「東湖にて及之の韻を次ぐ²³」を見てみよう。この詩は元好問が虢州（現在の河南省靈寶市）を訪れたときの作で、韓愈の「虢州劉給事使君の三堂新題に奉和す二十一詠²⁴」（以下、「奉和虢州」詩）を踏まえている。

西山山頭山月白 西山山頭 山月白く

倒影漣漪舞寒碧 倒影 漣漪 寒碧に舞ふ

竹溪花鳥要君詩 竹溪 花鳥 君の詩を要し

醉墨幾番枯硯滴 醉墨幾番 硯滴枯る

東湖佳処詩已盡 東湖の佳処 詩は已に盡き

矯首不知川路隔
首を矯ぐるも川路の隔たるを知らず

當年韓賈文章伯
當年韓・賈は文章の伯

物色分留到佳客
物色 分れ留りて佳客に到る

此州何必減蘇州
此の州 何ぞ必しも蘇州に減ぜんや

頻有詩人來列職
詩人の來たりて職を列すること頻りに有り

一時人境偶相值
一時 人と境と 偶 相ひ値ひ

万古風流余此席
万古 風流 此の席に余る

三堂風月今猶昔
三堂の風月 今猶ほ昔

擬払塵纓問投跡
塵纓を払ふに擬らへて投跡を問ふ

因君寄詩使君公
君に因りて詩を使君公に寄するも

却恐他年厭求索
却て他年求索を厭ふを恐る

(◆漣漪 水面の波紋、さざ波。◆寒碧 青く冷たい湖水。◆竹溪花鳥 韓愈の詩の題名。後述。◆韓賈 韓

愈と賈島。◆物色 景色、風景。◆此州の二句 虢州は韓愈が詩を奉じた劉伯芻などの詩人が刺史を務めた歴

史があり、同じく韋応物らが刺史を務めた蘇州に劣らない、という意。◆値 あう、出会う。◆三堂 韓愈が

詩を唱和した劉伯芻宅の建物。◆塵纓 塵の付いた冠のひも。俗世の官職や俗事をいう。◆投跡 人の後に倣

うこと。◆使君 地方の長官を言う語。ここでは虢州の長官。◆求索 探し求めること。)

この詩は虢州の東湖で友人の劉濤(字・及之)の詩に次韻したものであるが、東湖の風景を描寫しつつ、韓愈が詩

を作った往事を偲ぶということが主題となっている。詩全體が與える印象は、決して「女郎の詩」ではないが、「山石」詩のような力強い風格の詩であるとは斷言しがたい。第三句の「竹溪花鳥」は「奉和虢州」詩のなかの二首の詩題である。

藹藹溪流慢　　藹藹として溪流は慢く

稍稍岸篠長　　稍稍として岸の篠は長し

穿沙碧簔淨　　沙を穿つ碧簔は淨く

落水紫苞香　　落水紫苞香る

「竹溪」

蜂蝶去紛紛　　蜂蝶 去ること紛紛たり

香風隔岸聞　　香風 岸を隔てて聞く

欲知花鳥處　　花鳥の處を知らんと欲し

水上覓紅雲　　水上に紅雲を覓む

「花鳥」

この二首もまた韓愈の詩風として代表的な、奇字難語や險韻を用いておらず、さらには雄渾な作風の詩でもない。美しい春の風景を平明に描寫した詩である。元好問の詩には季節を明示する描寫が乏しく、第二句の「寒碧」のみでは冬とは判斷し難い。もとの二十一首の詩は四季折々の景を詠っているが、その中からこの二首の詩題を選択したのは、春にこの地を訪れたからであろうか。また「奉和虢州」詩は五言絶句という形式もあり、風景描寫を主と

しているが、本詩は冒頭二句のみが當地の風景を描寫しており、兩者には表現や詩句などの關連性が乏しい。韓愈が虢州刺史と唱和したというのが主題の根幹であり、韓愈の詩風を踏襲する意圖が全く見られない。

元好問にはもう一首、韓愈の詩に明らかに基づいた作品がある。「此の日惜しむに足らず」⁽²⁵⁾である。少々長い雜言古詩であるが、元好問らしいユーモアと起伏に富んだ構成を持つ作品であるので、全文を挙げたい。

此日不足惜

此の日惜しむに足らず

此酒不可無

此の酒無かる可からず

頗怪昌黎公

頗だ怪しむ昌黎公の

亦復爲世儒

亦た復た世儒爲るを

天生至神物

天は至神の物を生み

與人作華胥

人と與に華胥を作す

一酌舌本彊

一酌舌本彊ばり

二酌燥吻濡

二酌燥吻濡るる

三酌動高興

三酌高興動き

四酌色敷腴

四酌色は敷腴たり

連綿五六酌

連綿五六酌

枯腸潤如酥

枯腸潤ひて酥の如し

眼花耳熱後

眼花^{かす}み耳熱くなりて後

萬物寄一壺

十酌未渠央

百觚亦奚拘

人生一世間

忽若過隙駒

有酒不解飲

問君誰與娛

君不見東家騎鯨李

膽滿六尺軀

萬言黃石策

八陣夔州圖

酒酣起舞不稱意

長吁青雲指夷吾

又不見西家紫髯郎

老氣雄萬夫

狂歌飲燕市

擊筑聲鳴鳴

倚天長劍挿少室

萬物は一壺に寄す

十酌 未だ渠央せず

百觚 亦た奚ぞ拘めん

人生 一世間

忽たること隙を過ぐる駒の若し

酒有りて飲むこと解さざれば

君に問ふ 誰と與に娛しまんや

君見ずや 東家の騎鯨の李

膽は六尺の軀に滿つ

萬言 黃石の策

八陣 夔州の圖

酒酣なげなむにして舞を起こすも意かたに稱はず

長吁 青雲 夷吾を指す

又た見ずや 西家の紫髯郎

老氣 萬夫に雄たり

狂歌して燕市に飲み

筑を撃ちて聲は鳴鳴たり

倚天の長劍 少室に挿し

頗欲四海皆東湖
鷹揚虎視今焉如

頗る欲す 四海を皆な東湖にせんと
鷹揚 虎視 今焉に如く

河山永隔黃公罇
銜盃直待秋井塌

河山 永く黄公罇を隔つ
盃を銜へて直ちに秋井の塌を待ち

青苔白骨憐君愚
少年覓計生白須

青苔の白骨 君が愚を憐れむ
少年は計を覓めて白須を生ずるも

捫參歷井無危途
榮不滿睫良區區

參を捫め井を歴る危途無し
榮は睫に満たず 良に區區たり

就令一朝便得八州督
争似高吟大醉窮朝晡

就令へ一朝にして便ち八州の督を得るも
争似か高吟大醉して朝晡を窮めん

餘名安得潤枯骨
四十豈不知頭顱

餘名 安ぞ枯骨を潤す得ん
四十 豈に頭顱を知らざらん

此日不足惜
此酒不可無

此の日 惜しむに足らず
此の酒 無かる可からず

太虛爲室月爲燭
醉倒不用春風扶

太虚を室と爲し月を燭と爲す
酔ひて倒るるとも春風の扶ふるを用いず

（◆昌黎公。韓愈の尊稱。昌黎は韓氏一族の出身地。◆世儒。俗儒。陳腐な儒學者。◆至神。この上なく神妙不可思議である。◆華胥『列子』黄帝篇に見える、黄帝が晝寢をして夢の中で遊んだ理想の國。ここでは醉

いが回った状態を指す。◆舌本彊 舌本は舌のこと。彊は僵に同じ。うまく動かなくなる。◆敷腴 愉快な様子。◆酥 乳製品。轉じて柔らかくなめらかなものを形容する。◆眼花耳熱後 李白「俠客行」に「眼花耳熱後、意氣素霓生」とあるのをそのまま用いている。◆渠央 早々と終える。◆觚 古代に用いられた青銅製の酒器。大きな盃。◆拘 制止する、止める。◆騎鯨李 俗に李白は酔って鯨にまたがり潯陽で水死したと言われ、李白を形容する語として用いられる。ここでは故人である李純甫を指す。◆萬言黄石策 泰和年間の南征の際に、李純甫が二度に渡って上奏した策を言う。黄石は漢の張良に『太公兵法』を授けた隠士。◆八陣夔州圖 諸葛亮が夔州で練兵の際に敷いた八陣圖という陣形。『歸潛志』卷一では李純甫は兵書を脩め、諸葛亮や王猛のような人材であると自負していたという。◆長吁 長い溜め息。◆青雲 遠大な抱負の喩え。青雲の志。◆夷吾 春秋時代齊の桓公の宰相、管仲の字。◆紫髯郎 金末の人物、張穀を指す。◆少室 河南省嵩山の西の峰、少室山。◆黄公讎 晋の時に王戎が阮籍・嵇康と酒を飲んだ場所。後に王戎がこの地を通り過ぎたときに二人とも世を去っており、故人を偲んだ。故人を追悼する意味を表す典故。◆銜盃 李・張とも酒好きで、特に李純甫は過度の飲酒が原因で死去している。◆秋井 陵墓。次の句と併せて、杜甫「蘇端薛復筵簡薛華醉歌」に「忽憶雨時秋井塌、古人白骨生青苔」とあるのを踏まえている。◆覓計 生活の方途を探す。◆捫參歷井 參・井は星宿の名。李白「蜀道難」に「捫參歷井仰脅息」という句があり、以降山の高さや険しさを表現する語となった。ここでは高位高官に登る道と言う。◆榮 富貴。◆區區 非常に小さい様。◆朝晡 朝から夕まで。終日。◆餘名 死後の虚しい名声。この句は『列子』楊朱篇を踏まえる。◆頭顱 頭、頭腦。この句は蘇軾「段屯田に送る 分けて于字を得る」の詩句をそのまま用いている。梁の陶弘景の故事を踏まえ、四十年前後で官を退くべきことを言う。）

この詩は韓愈の「此の日惜しむ可きに足る一首張籍に贈る」(以下「此日足可惜」詩)を着想の元としつつ、韓愈、盧仝ら韓門文人の詩句や言い回しを用い、併せて李白の詩句を多用している。冒頭四句は明らかに韓愈詩の「此の日惜しむ可きに足り、此の酒嘗するに足らず(此日足可惜、此酒不足嘗)」をパロディにしており、諧謔味に溢れている。また第七句「一酌舌本彊こほばり」から第十六句「百觚亦た奚ぞ拘とどめん」までは、盧仝「筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するに謝す」の組み立て方を模倣している。「此日足可惜」詩は自らの來し方の回顧が主題であるが、この作品では亡くなった李純甫と張穀を追憶しながらも、沈鬱な悲しみを敢えて描いていない。まず韓愈本人とその詩句をからかうことから始まり、酒の効能を賛美しつつ、在りし日の李純甫と張穀が痛飲した光景を描いている。故人を偲びつつも感傷的にはならず、基本的にユーモラスな口ぶりを保っている。元好問の友人も楊弘道も「此日足可惜」詩に倣った詩を残しているが、元好問とは對照的に、自らの過去を回顧する詩題や五言古詩という詩型は韓愈詩を忠實に踏襲しつつ、非常に沈鬱な内容である。これらのことから元好問における韓愈詩の受容態度は李純甫と似通っており、韓愈詩の諧謔的な側面に着目していると言えるのではないだろうか。

五. 盧仝への關心

李賀・韓愈に次いで、元好問が多くの詩句を用いている韓門文人は盧仝である。一般的に金末の人々は孟郊・賈島に比べて盧仝への關心が高く、この時代の一つの特徴だと言えよう。²⁶⁾だが元好問が盧仝へ關心を持つているのは、少々異なる理由も存在していると思われる。盧仝は山東濟源の出身であり、嵩山に隱棲した。元好問も嵩山に隱棲した時期があり、金朝滅亡後は一年ほど濟源に寓居した。兩者の間には地縁があり、元好問はおそらくこのような

關係を意識していたであろう。濟源を訪れた際の詩では「盤谷の村墟 幾たび來往す、玉川の人物は自づと風流（盤谷村墟幾來往、玉川人物自風流）」（卷十四「濟源に遊ぶ」）と述べ、盧仝に言及している。

元好問が作品中で用いている盧仝の詩句は、「月蝕詩」が三例、「筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するに謝す」が四例で、この二首に集中している。「月蝕詩」は盧仝の作品中最も人口に膾炙した詩である。元好問もその詩語や表現を使用しているが、その主題や詩形を踏襲することはしていない。「蟾池」（卷四）は盧仝の「月蝕詩」と同様の神話傳説から始まるが、一轉して現實のカエルを描寫してゆく。

老蟾食月飽復吐

老蟾 月を食べ飽きて復た吐く

天公一目頻年瞽

天公の一目 頻年めしひ瞽る

下界新增養蟾戸

下界 新たに養蟾の戸を増し

玉斧誰憐脩月苦

玉斧 誰か月を脩むるの苦を憐れまん

郡國蟾池知幾所

郡國 蟾池 幾所か知る

碧玉清流水仙府

碧玉 清流 水仙府

小蟾徐行腹如鼓

小蟾は 徐おもむろに行きて腹は鼓の如く

大蟾張頤怒於虎

大蟾は 頤おがみを張りて虎より怒る

渠家眉間有黃乳

渠家 眉間に黃乳有り

膏粱大丁正須汝

膏粱の大丁 正に須く汝がごとし

何人敢與月復讎

何人が敢へて月と復た讎せんや

疾過池頭不容語 疾く池頭を過ぎて語を容れず

向來屬私今屬官 向來私に屬し今官に屬す

從今見慕當好看 今從り慕に見ゆれば當に好く看るべし

爬沙卽上青雲端 沙を爬ひて卽ち青雲の端に上る

(◆老蔓の句 蔓はカエルの總稱。ここではヒキガエルを指す。弓の名手羿の妻姪娥は、夫が西王母より賜った不死の薬を持って月に逃げ、ヒキガエルとなって月に住んだという傳説がある。また月に住むカエルは月を食べるといふ傳説も、『淮南子』高誘注などに見える。◆脩月 ここではカエルが月を食べることをいう。◆蟾池 ヒキガエルを養殖する池。施國祁注は金朝南渡後の近侍局を指しているという。◆小蟾・大蟾 施國祁注を踏まえると、これは近侍局の局官を暗喩している。◆渠家 彼、彼ら。◆眉間有黄乳 古代の夫人が黄色の染料で額を裝飾した「額黄」を指すか。近侍局の官吏はみな權門の子弟であり、化粧をして着飾り、常に高官の周囲に侍つて阿諛追從していたと、劉祁は『歸潛志』卷七で批判している。◆膏梁 脂身の多い肉と上等の穀物。轉じて富貴であることを指す。◆大丁 青年男子。◆爬沙 韓愈「月蝕詩效玉川子作」に「爬沙脚手鈍、誰使汝解縁青冥」とある。)

この詩はヒキガエルを飼育している池を題材としながら、眼前の景物を寫實的には描寫していない。冒頭の二句は盧仝「月蝕詩」の「傳説古老説、蝕月蝦蟇精」等と同様の神話を下敷きにし、神話や傳説と目の前のヒキガエルを結びつけ、カエルと池の様子をやや誇張して描いている。金末の詩人には既にこのような手法を用いている先例があり、李純甫はこのような誇張表現を度々用いている。例えば彼の「猫飲酒³⁰」詩は、全編にわたって大げさな典

故を使って一匹の猫を描いたユーモラスな作品である。この「蟾池」詩の前半は李詩と同様の手法を用いているが、李純甫は題材である猫と全く関係のない典故を用いているのに對し、元好問は眼前のヒキガエルから神話傳説中のカエルへと連想を広げ、主題に即した典故を用いているという違いがある。さらに、詩中の大蟾・小蟾は當時の權門の師弟を暗喩しており、彼らが高官との関係を利用して官位を得ていることを風刺している。本詩はユーモラスな作風でありながら、「月蝕詩」と同様に社会風刺の意圖も含んでいる。しかし「月蝕詩」は詩型が極度に散文化し、神話傳説を多分に交えて奇想を展開しているのに對し、元好問の本詩は十五句と少タイレギュラーな句數ながら明白な七言古詩であり、前半六句が神話傳説を踏まえる以外は内容・表現ともに類似性に乏しい。「月蝕詩」は着想の材料のひとつではあろうが、これに拠った、ないしは換骨奪胎したとまでは言い難いだろう。

先ほどの「此の日惜しむに足らず」でもその影響を指摘した盧仝の「筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するに謝す」詩は、「月蝕詩」ほど人々の關心を集めておらず、宋代の詩話においても范仲淹の「鬪茶詩」などと對比される程度である。元好問はその詩句、「三椀 枯腸を搜すも、唯文字五千卷有るのみ（三椀搜枯腸、唯有文字五千卷）」を愛唱し、自己の作品中で「玉川文字五千卷、鄭監才名四十年」（卷九「康顛之に別る」）等、度々用いている。だがこれは盧仝の影響のみならず、蘇軾の影響も受けている可能性が高い。蘇軾は「試院煎茶」詩でこの詩句を元に「撐腸拄腹の文字五千卷を用ひず（不用撐腸拄腹文字五千卷）」という詩句を作っており、以降多くの詩人たちがこの表現に倣っている。恐らく元好問も例外ではあるまい。

撐腸文字五千卷

撐腸 文字五千卷

靈臺架構森鋪張

靈臺 架構は森として鋪張す

卷三「密公寶章小集」

(◆撐腸 撐は飽きる、満ちるの意。お腹いっぱい。◆靈臺 心。◆架構 詩文の組み立て、構成。◆森 數が多い様。◆鋪張 述べ連ねる。)

撐腸正有五千卷 撐腸 正に五千卷有り

下筆須論二百年 筆を下すに須く二百年を論ずべし

卷九「郝經伯常に贈答す 伯常の大父子少日之に従ひて科擧を學ぶ」

そのため元好問の「筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するに謝す」詩への關心は、單純に盧仝詩を愛唱した結果であるとは斷言しがたい。一般に認識されているように、元好問の蘇軾に對する關心は、盧仝に對するものより遙かに大きいからである。結局、元好問詩からは盧仝へ關心を示していることが見いだされるものの、使用頻度や典故とした作品數を考慮しても、その詩歌の影響は李賀のように大きなものではないと言えるだろう。

六. おわりに — 元好問の詩歌觀における韓門文人の位置づけ —

元好問における韓門文人の受容は李賀・韓愈・盧仝において顕著であり、そのなかでも受容態度や影響力において差があることが分かった。では彼の詩歌理論において、韓門文人はどのような地位を占めているのであろうか。實のところ文學批評に關する詩文のなかで、「論詩三十首」を除くと元好問はほとんど韓門文人に言及していない。その詩歌の受容狀況から比べても、詩歌理論においては重視しているとは言いがたい。例えば彼は晩年に「學至於無

學」という説を提示し、三人の詩人を例示している。

佛敎道教の説に「道を爲して日々損する」という説があり、また「學びて無學に至る」という説がある。詩家にもまた同様のことがある。杜甫の夔州移居以後、白居易の香山隱棲以後、蘇軾の海南島貶流以後、みな推敲を重ねなくとも自然と「平仄などの詩律に」合致している。技巧をその道で研鑽した者でなければ、このようないことが出来るであらうか。

方外之學有「爲道日損」之説、又有「學至於無學」之説。詩家亦有之。子美夔州以後、樂天香山以後、東坡海南以後、皆不煩繩削而自合、非技進於道者能之乎。

卷三十七「陶然集詩序」

詩家には老莊や佛敎と同様の境地があると、元好問は言う。學問を涵養し技藝を研鑽し、最後はそれらに心を碎かなくとも學問技藝は自然と發揮される、融通無碍の境地に達するという説である。彼は杜甫・白居易・蘇軾の三人が晩年にこの境地に達したと見なしている。だがこのような見方、表現は元好問の獨創ではなく、黃庭堅の説を踏まえたものである。

杜甫の夔州移居以後の詩、韓愈の潮州から朝廷に戻って以後の文は、みな推敲を重ねなくとも自然と合致している。

觀杜子美到夔州後詩、韓退之自潮州還朝後文章、皆不煩繩削而自合矣。

黄庭堅「王觀復に與ふる書」⁽³³⁾

「繩削を煩さずして自づと合う」という評語は宋代の詩話以降、技巧を感じさせない詩を評する際の常套句となつた。ここで黄庭堅は杜甫の詩と韓愈の文を高く評價しているが、元好問はこの説を踏まえつつ、専ら詩のみを論じ、韓愈を除外して白居易と蘇軾を加えている。このことから、少なくとも詩歌においては、韓愈は潮州以後も「繩削を煩さずして自づと合う」という境地に達していると元好問は見なしていない、ということが窺える。さらにこの表現は韓愈がオリジナルであり、故人の著述を評した語であつた。

〔樊紹述の著作は〕必ず仁義に關することである。その〔内容の〕富かな様子は萬物を生みだし蓄えたかのようであり、必ず海や山〔などの大自然を〕備え、自由氣儘で統率が無いのに、大工が墨繩を引いて工具で削るようなことに煩わされることなく、〔然るべき所に〕自然と合致している。

必出入仁義、其富若生蓄萬物、必具海含地負、放恣縱橫、無所統紀、然而不煩於繩削而自合。

韓愈「南陽樊紹述墓誌銘」

この表現が元來韓愈に由來するものであると、元好問は當然知っていたであろう。にも関わらず詩人韓愈を、その境地に達した人々から除外したというのは、少々皮肉な結論である。韓愈の詩には前述のように、分かりやすく力強い作品、繊細優美な作品があるとはいえ、やはり彼の特徴的詩風は險韻奇字を驅使した「繩削を煩わす」ものであると見なしていたのであろうか。

元好問の詩歌観から見れば、險怪で分かりにくい詩とは詩歌の正統的スタイルである「正體」ではなく、その表現や詩の組み立てから少なからぬ影響を受けたとしても、そのような詩歌は「雜體」に過ぎない。詩歌に關して言えば、當時韓門とは別のカテゴリーの詩人として論じられていた柳宗元に對する元好問の評價は、韓愈や李賀に比べて遙かに高い。彼は基本的に儒家の傳統的な詩歌観に立ち、溫柔敦厚な風格を規範としながら、これに合致する要素を受け入れていると言えるだろう。このような受容態度はその師である趙秉文と同様のものであり、また韓愈の持つ滑稽という側面に注目したのは、李純甫と同様の見方である。元好問は傳統的な詩歌観から逸脱せずに、一方で新たな表現や風格を創り出すことを模索し、趙・李の見地を兼ね備えつつ實作において彼らの作品を乗り越えた。元好問における韓門文人の受容態度は、彼が金代詩歌の集大成者と目されてきたことを裏付ける一つの材料と言えるだろう。

(本稿は第七回宋代文學國際シンポジウム(河南大學、二〇一二年)における發表論文「元好問對韓門文學的接受」を加筆修正したものである。)

注

(1) 劉明今『遼金元文學史案』(上海古籍出版社、二〇〇四年)第一編第十三節「燕薊詩派」の項を参照。趙著・呂鯤・趙衍はいずれも生卒年等不詳であり、現存する詩も極めて少ない。趙著の現存する作品は一首、呂鯤は詩一首と耶律鑄の詩文集に寄せた序「双溪醉隱集序」が現存するのみである。彼らの詩學的主張は趙衍「重刊李長吉詩集序」から窺うことができる。彼らの存在はほとんど注目されておらず、「燕薊詩派」という名稱も遼金元詩文研究者の間でさ

え定着していない。

- (2) 史偉「宋元之際江南李賀詩風的流行」、『江西社会科學』二〇〇六年一二期。
- (3) 拙稿「金末における韓門文人の受容(上)——李純甫と韓門文人——」「中國詩文論叢」第二十七集、二〇〇八年。および「金末における韓門文人の受容(下)——趙秉文と韓門文人——」「中國詩文論叢」第二十八集、二〇〇九年。
- (4) 『元好問全集』(増訂本) 卷十一、山西古籍出版社、二〇〇四年。以下、元好問の作品は本書に據り、巻数のみを示す。
- (5) 元好問研究において「論詩三十首」は多くの清代以降多くの學者が關心を寄せ、先行研究の過半数を占める。ここでは各研究者の解釋を縷々取り上げることがはしないが、以下の二つの書籍が各詩の解釋を概観する際に便利である。劉澤『元好問論詩三十首集說』、山西人民出版社、一九九二年。方滿錦『元好問「論詩三十首」研究』、萬卷樓圖書、二〇〇二年。
- (6) 宗廷輔『古今論詩絕句』、光緒中常熟宗氏刊、民國六年徐兆璋印本『宗月鋤先生遺箸八種』所収。東洋文庫藏。
- (7) 郭紹虞『元好問論詩三十首小箋』、人民文學出版社、一九七八年。
- (8) 劉禹昌『元好問詩論』、『元好問研究文集』所収、山西人民出版社、一九八七年。
- (9) 胡傳志『金代文學研究』第二章第一節「論詩三十首」辨釋、安徽大學出版社、二〇〇〇年。
- (10) 清代の詩話では沈德潛・方東樹・潘德輿らがこの詩を以て孟郊詩への批判の論據としている。郭紹虞は彼らが孟郊批判のためにこの詩の意義を過大に評價しており、あくまでこれは元好問個人の孟郊評價だとしつつ、その評價は公正でないと無いとしている(『元好問論詩三十首小箋』)。以降、多くの論者が郭氏と同様の見地に立っている。
- (11) 秦觀「春日」五首其二「一夕雷落萬絲、霽光浮瓦碧差差。有情芍藥含春淚、無力薔薇臥晚枝。」『淮海集箋注』四三二頁、上海古籍出版社、二〇〇〇年。
- (12) 韓愈「山石」「山石筇確行徑微、黃昏到寺蝙蝠飛。昇堂坐階新雨足、芭蕉葉大支子肥。……」『韓昌黎詩繫年集釋』一四五頁、上海古籍出版社、一九九八年。
- (13) 方滿錦『元好問「論詩三十首」研究』第四章「論詩三十首之辨正探微」。

- (14) 例えば郭紹虞『元好問論詩三十首小箋』など。
- (15) 『元好問全集』卷四「張教授仲文に贈答す」自注、同卷七「汴禪師自ら普照の瓦を斲りて研と爲し、詩を以て餉と爲す、爲に和す二首」其の二自注、同卷八「寄せて景玄兄に答ふ」自注、同卷十一「徳和の墨竹扇頭」自注。
- (16) 趙翼『甌北詩話』卷八「遣山復句最多」。人民文學出版社、一九八八年版。
- (17) 例えば「蛟龍引」（『元好問全集』卷六）では詩中に李賀の典故を用いていない一方で、温度や色彩を表す語を用い、各句の繋がりも飛躍が多いという點で、李賀詩に近い風格を作り出している。
- (18) 錢鐘書『談藝錄』第十二則（中華書局、一九八四年版）が既に李賀詩における「代詞」の問題を指摘しており、川合康三氏はこれを「換喩」と「提喩性代詞」であると分析している。川合康三「李賀詩の表現——代詞形容詞の用法を中心に」（『文化』四四号、一一八〜一三八頁、一九八一年）を参照。
- (19) 『全遼金詩』第一六五六頁、山西古籍出版社、二〇〇一年。
- (20) 趙秉文「答李天英書」、『閑閑老人滄水集』卷十九、『四庫全書』本。
- (21) 同前注20。
- (22) 中晩唐における苦吟については岡田充博「中晩唐期〈苦吟〉覚え書き―苦吟という言葉の意味内容・使用状況の検討を中心として」など、多くの先行研究がある。従来は詩の創作に苦しむという面でのみ捉えられてきたが、中木愛氏によれば「孟郊の苦しみはより良い表現を求めて推敲を重ねるといふ、創作の過程の中で生じる苦しみではなく、自分の詩を外の社会に置くときに生じる諸々の軋轢によってもたらされる苦しみであった」という指摘もある。「孟郊の〈苦吟〉の様相…『雪』の語を手がかりとして」、『中國中世文學研究』第五十七號、二〇一〇年。
- (23) 『元好問全集』卷四。
- (24) 『韓昌黎詩繫年集釋』八八八〜八九九頁。
- (25) 『元好問全集』卷五。
- (26) 『韓昌黎詩繫年集釋』、八四頁。

- (27) 盧仝「筆を走らせ孟諫議の新茶を寄するに謝す」(『全唐詩』卷三八八)に「一椀喉吻潤、兩椀破孤悶。三椀搜枯腸、唯有文字五千卷。四椀發輕汗、平生不平事、盡向毛孔散。五椀肌骨清、六椀通仙靈。七椀喫不得、也唯覺兩腋習習清風。」とある。
- (28) 楊弘道「幽懷久しく寫かず一首 韓子『此日足可惜』に效ひ彦深に贈る」、元代別集叢刊『李俊民集・楊奐集・楊弘道集』三九八頁、吉林文史出版社、二〇一〇年。
- (29) 鄭慧霞『盧仝綜論』第四章第二節「縱橫誰似玉川廬——盧仝詩歌對金元的影響」を参照。光明日報出版社、二〇一〇年。
- (30) 「枯腸痛飲如犀首、奇骨當封似虎頭。嘗笑廟謀空食肉、何如天隱且糟丘。書生幸免翻盆惱、老婢仍無觸鼎憂。只向北門長臥護、也應消得醉鄉侯。」『全遼金詩』第二〇七六頁。
- (31) 『韻語陽秋』卷五、『苕溪漁隱叢話』後集などを参照。
- (32) 『蘇軾詩集』第三七〇頁、中華書局、一九九六年。
- (33) 『黃庭堅全集』第四七〇頁、四川大學出版社、二〇〇一年。